

2025年2月の総評に代えて

○林 桂○

●鈴木雀●(埼玉県 29歳)

鈴懸の木に吊るされるわたしたち

【評】一般市民の「わたしたち」が、市民生活の場である鈴掛並木に吊され絞殺されるというイメージであろう。ジェノサイド被害者としての「わたしたち」である。現在の世界情勢の中での潜在的な恐怖がこのような表現になっているのだろう。

●田崎森太●(東京都 73歳)

月命日ミモザの花のこぼす錆

【評】月命日ごとの墓参に、季節の花も変わってゆく。手厚い吊いの想いだ。鮮やかなミモザの花の季節も、その花が散り始めている。黄色い花は錆色になって散ってゆく。そこに亡き人への深い思いが重なっている。

●櫻川 佳子●(愛媛県 36歳)

純粋な心持つ母に育てられ  
僕らはカモとして生きている

【評】「純粋な母」は、「僕ら」を社会の中で善良な市民とすべく育てるのである。ある意味で標準的な子育てともいえるだろう。しかし、社会に蔓延する悪意から、善良な市民「僕ら」は「カモ」として狙われやすい。子育ての難しい社会ではあるが、ここにも根本的な難しさがあるか。

●ムクロジ●(群馬県 17歳)

花冷の糸に重たいティーバッグ

【評】「糸に重たい」には、カップの中で「ティーバッグ」が水分を吸って重くなったさまの描写である。17歳とは思えない修辞力だ。「花冷え」の季節の少し物憂い感じもここには表現されているだろう。

●檜野 美果子●(宮城県 36歳)

繋がれに行く犬春の雲降りて

【評】ドッグランなどに放たれた犬が、遊び終

えて飼い主のもとへ帰る。それを「繋がれに行く犬」という。自ら拘束を選ぶ犬には、それが疑う余地のない訓練された習慣なのである。「春の雲降りて」と遠景を見ている「作者」には、その習慣がどこか切なく感じられている。翻って、「私たち」も、無自覚に何かに繋がれていないか。「作者」は、そう思っているのだろう。

●石村 まい●(兵庫県 25 歳)

貝のうちに真珠ふくらむ春の日の  
どうしようもなくきいらい眠気

【評】真珠を育てるアコヤ貝の中には眠気が充満しているという。しかも「きいらい」。閉じた世界には、眠っているような他にはないゆっくりとした時間が流れるのだろう。

●川上 真央●(東京都 17 歳)

すずらんのように  
うなじを光らせて  
眠るあなたがまぶしい始発

【評】遠距離通学の高校生を思わせる。朝早い始発の電車の席で、しばしのうたたねをしている。「すずらんのように／うなじを光ら

せて」には、女子高校生の姿が浮かぶ。芸術系の遠距離の学校へ通っていると思われる高校生の姿をときどき見かける。自ら選んだ道を歩み始めた「あなた」を遠望しながら、応援する思いが「作者」にはあるだろうか。

●山口 みな●（兵庫県 24 歳）

形のある未来を掴むのに  
必死だった  
趣味じゃないスカートが  
壁にかかっていた

【評】就活の会社訪問や面接試験用のリクルートスーツを「趣味じゃないスカートが／壁にかかっていた」というのであろう。自己アピールを求められながら、自己を消すような画一的で儀式的な服装に馴染めなかったのだ。

●加那屋こあ●（東京都 53 歳）

鳥  
    眠り  
風の冠  
    花曇

【評】「り」音の脚韻を踏む多行形式の句。

花の季節の倦怠感が「眠り」「花曇」にある。  
「風の冠」は、花を覆う「花曇」の喩となっているのだろうか。

●互井宇宙論●（埼玉県 18歳）

納豆によく付いてくる責任感

【評】「よく付いてくる」が、この句を分からなくしている。そこが面白いのだが。「付いてくる」ならば分かるのかといえ、それも分からないが、「よく付いてくる」だと一層分からなくなる。「納豆」の責任感って何だ。こう書かれると、「納豆」は、責任感から一番遠い食物ではないかなどという不思議な疑問が湧いてきてしまう。